

江勢方物語

清水義範



え せものがたり
江勢物語

しみずよしゆり
清水義範



角川文庫 8381

平成三年十一月十日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三—三

電話 編集部(〇三)三八一七—八四五—

営業部(〇三)三八一七—八五二—

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

えせ
江勢物語

清水義範



角川文庫 8381

目次

現代語訳「江勢物語」

生臭心経

スノー・カントリ

かくもわかりにくい日本語のキーワード

ほんのジョーク

タテのものを横に

訳者あとがき

日本の猫である

町の顔

我がインド

再びのインド

あとがき

解説

阿刀田 高

二五九 二〇九 一七九 一五九 一三九 一二九 一〇九 八九 六九 四九 二九

現代語訳

「^え江^せ勢物語」

初 段

昔、ある男が、奈良の都に初めて上り、その街の賑やかさに触れて自分が今まで田舎者であつたことを大いに恥じたのであつた。この都では（自分のように）田舎びた物腰や様子では、大いに人々から軽視されるであらうと思うにつけても、早く都会性を身につけたい、そうでなければ恋人もできないだらうと考へて焦るのであつた。物事の道理をわきまえない若い人にはありがちなことである。

ところが、そんなふうに（男が）思つて住んでいるその一角に、大そう立派な身分というのではないが、その美貌と教養で、あの人たちこそ、と人々に注目されている姉妹が住んでいた。

先の右大臣の血筋にあたる娘たちで、今はそう経済的に恵まれてゐるわけではなかつたが、笠張りの翁という長者の庇護を受けていて、人に指をさされるほどみじめな境遇でもなくいられた。

ある時男は、とあることからその姉妹を物陰からのぞき見てしまい、世の中にこんな美しい人がいたのかと、いっぺんに恋に落ちてしまった。そこでまず男は、二人の娘のうち

の姉姫のほうに、都会ぶって次のような歌を送った。

しみ垂れの若紫の袈裟けさじょうも衣

しのぶの乱れよばれそめにし

〔あきれるほどに欲の深い春日山かすがの僧侶そうりよの若紫色の袈裟の色もそうであるように、（私のあなたへの）忍ぶ思いはあつという間に人の知るところとなつて（お門違いな恋をするものだと）笑いものになるでしょうが、それでも構わないという気がするほどに私の心は燃えております〕

ところが、世の中に手違いというものはあるものである。その歌（をしたためた短冊たんざく）が妹姫のほうに届いてしまった。

姉姫にあてた歌とも知らずに、どこの誰（ともわからぬ男）かからこのように、垢あか抜けせず田舎びた（もの言いの）歌が寄せられるようでは（私も）身も世もないことであるとすっかりしよげきつて、（かりそめに）作った返歌がこうである。

とりたての根津ねづの白魚さよふけて

こよひ
今宵も月はけだしぬくかも

「笑われても構わないと、おっしやるあなたのその口から、ぬけぬけと根津の白魚（という世の人々がおいしいと噂するもの）が見え隠れするようでは、とてものこと本当の心がどこにあるか考えもつかず、今宵はすっかりけだしぬいてしまう私です。（私のことはあきらめて下さい）」

ところが、この歌が間違つて姉姫のところへ届けられてしまったから大変である。どうして続けざまに二度もと不思議な気がするような愚かしい間違ひがあるのもまた、世のならいでありましょうか。

この歌を読んだ姉姫は、自分の妹の文字と気がついててもよきそうなのに（そういうこともなく）、男の歌と女の歌の違いに気がつくのが普通であるのに（そういうこともなく）、ふん、と冷たくつきはなして、それでも返事だけはこの周囲のすすめで次のような歌を詠んだ。

なけなしの人をうらめばをだまきに
着つつぬれにし我は知らずな

「ちよいと冗談じゃないわよ。あんな田舎風な歌で都会の女がくどけると思ってるの。
バババ、バーロー」

この返事を見て男は、いくらかスマートになったかと思っていたのに、やっぱりまだ
(自分は) 垢抜けないのかと大いに悲しんで、故郷へ帰ったそうである。

実にもっておかしい話があるものだ。

第二段

昔、ある男がいた。その男は、自分を(都にいても)役に立たない男だと思いこんで、
(もう) 京にいてもしかなかった。東国に移り住もうと考えて旅に出た。

そうして、仲間の二人か三人といっしょに旅をするうち、遠江ととおの国の八つ滝というところ
にさしかかった。八つ滝とは、そこに川があつて滝が八つあつたからそう呼ばれたの
だと(趣味心のある人は)思うであろがそうではなく、大層興ざめなことであるが、滝
という名の人が昔八人住んでいたからそう呼ばれるのであり、不本意なことである。

そこで一行は足を休めて弁当をたべたりしたのだが、ふと見ると崩れかけた大層粗末な
家の脇わきにはげいとうが咲いていた。そこで(一行の中の一人が)はげいとうを頭に詠みこ

んで歌を作ってみようと（提案したところ）、すぐさま男は次のような歌を詠んだ。

はげぬれば げにおそろしげ 井戸めぐり としのはじめの 馬の耳やも

〔昔から世間の人が言う通り、禿頭はげあたまの男が雨にぬれば、井戸の周囲のようにびしょびしょにぬれて（髪がないので大層冷えて、とんでもなくおそろしいめにあうという話があるように）、私は京にいる女性を思つて（馬のように耳を立てて）噂うわさがきこえてこないかと望んでいる。だがそこにはただ風が吹いているだけ。悲しいことである〕

注：としのはじめのは、意味のない合いの手のことば。

これを聞いて一行の人々は、それぞれ都に置いてきた恋人のことを思い出して涙をこぼしたので、弁当がびしょびしょになってしまったことである。

旅というものは人の心をか弱くするというが、（この話からも）よくわかるであろう。

第三段

昔、男がいて、多情な女を恋していた。ある時女の本心を知つてみたい氣になつてこんな歌を送った。

われならで夏の日暮らし流れても
いづれへだてて入るべきものを

〔昔、相撲取りに竜田川というのがいて、千早という女に振られ、その妹の神代もいうことをきかなかったという話があるように、（私の身にも）女に振られる不幸があるかもしれないと（空想してみるにつけても）心が苦しい。そんな私の不安をあなたは思ったことがあるでしょうか。（いやいやないでしょう）〕

その返歌（は次の通り）。

待つうちにしでの田長は鳴く鹿の
我に教へよ海人の釣舟

〔ほととぎすよ、あなたが鳴いて訪れる里が（私の里だけでなく、ほかにも）たくさんあるので、あなたをいとしく思うものの、やっぱり悲しくなってしまうのよ〕

会話になっていないわけなのであることだなあ。

第四段

昔、男がいて、美しい女に次のような歌を送った。（それは）なかなか奥の深い歌であつた。

たちねの母の背中にあたはむれて

むべ山川と人のいはるる

「かつて私がまだ幼児であつた頃、中国から来た身分の高いお坊さんに（母が）人相を見させたところ、「うん。この子は将来三千人の人間の上に立つ身分になるのだが、そのあとが、むにやむにや」とおっしゃったので母は大層驚き、三千人の人間の上に立つのは（とても嬉しいことだが）、むにやむにやとはどういうことであろうかと（思つて）、何度も問うのだが、（高僧は）はれはれ、とか、ひらひら、とか（意味不明のこと）を言つてはぐらかすばかりであつた。それ以来母は私のことを大層案じて、よい子に育てるにはどういふところへ住めばよいだろうと思案して、お寺の前に転居してみたところ、（私は）お経を読む遊びばかりしているので（これではよくないと考え）、今

度は商人の家の近くに転居してみたところ、（私は）錢勘定の遊びばかりしているので（これではよくないと考え）、今度は医者（イサ）の家の近くに転居してみたところ、（私は）お医者さんごつこばかりしているので、とうとう（母は）あきれかえつて、この子はどうせ将来がむにやむにやなどというどうしようもない者なのだから（教育について）あれこれ考えても意味がないわなあ、と考えて（子供のことを）どうでもよいと思うに至った。ところがその頃、都に大きな火事があり、多くの人が被災したので大層（オホソウ）の毒なことだなあと（人々が）思っているうちに私は成長して立派な大人になった。ある時、帝が私の（優秀な青年であるという）噂（うわさ）を耳になされて、召し出して会ってみると世評にたがわずルックスもすがすがしい知的な青年なので、（試しに）「香炉峰（こうろほう）の雪は」とおおせになると、（私は）すつと立ち動いて（無言で）簾（すだれ）をかかげたので（そういう教養あるふるまいのできるこの人間は）大層有能である、とおぼせられて（私を）高い身分につけて下さったものであることだなあ。そのような次第によって少年時代の予言の半分はあたったのですが、それを思うにつけても、予言の（残りの半分の）むにやむにやはどういふことだろうかと思えると、（不安で）夜もねられないのであるのだったけれども、そんな私が、先日あなたをちらりと（しらす）のぞき見ることがあり、のぞき見るといってもそれは決して行水（している女性の裸）をふし穴からのぞくというようなあののぞきではなく、いわゆる、かいま見、というやつで当時はそれが普通のことであつたので

(受験生は)間違えないように。その時から私は激しい一途な恋におちてしまいちよつとフォーリン・ラブであるのであろうか、いやいや決してそんななまやさしいものではない。(食事も)喉のどを通らないほど恋してしまった私は、ああこれがあの時の(高僧の)予言したむにやむにやなのであるのかなと思ひ、(きつとこれがもとで)私は(恋いこがれて死んでしまうのだ)という(気がしてならないの)ですが、(それでも構わ)ない(というほどに激しくあなた)を(思うのです)。つまり一言で言えば、あなたが好きです」

ところが、(この歌は)あまりに意味が深いので、女には意味が伝わらなかったそうである。むつかしすぎる歌というのも考えものであるわなあ。

第五段

昔、ある女が、男もするという日記を女(である私)もしてみんとするなり。ところが日記というものは、日々に起こったことを書きつけるものであるのに、その女は日常のことなどには興味がわかないので、自分の感性に心地よいことだけを書きつらねたそうだ(たとえばこうである)。

「春はやっぱり早朝がいいと思うのよね。だんだんに黒い山の輪郭線がくつきりしてきて、

むこうの空がほの明るくなつてきて、紫色に立つてばかりいる雲がすこし、棚を引いたりするのつて最高」

「夏は夜よ。それもウィーンの社交界のパーティーに出席したりするのが一番ゴージャスだと思う。実は私もそこに招待されて出席したんだけどもう、うっとりしちゃった。その日のためにダンスもすつごく熱心に習ったのよ」

ところがその日記（もどき）が人の目に触れることになり、いいわあ、この人の感度最高じゃん、という評判が立つてたちまち女は人気者になってしまったそうである。

そんな彼女の詠んだ歌（にこういうものがある）。

この味がいいねと君が言ったけど

六月十日は時の記念日

〔この味がいいねと彼が言ったんだけど、その日は六月十日だったからそれが時の記念日であるということは動かしがたい事実なのよね〕

これらを見るにつけても、やっぱり今は女性の時代であり、そのことを正しく理解していないと自民党もどえらいめにあうことだなあ。